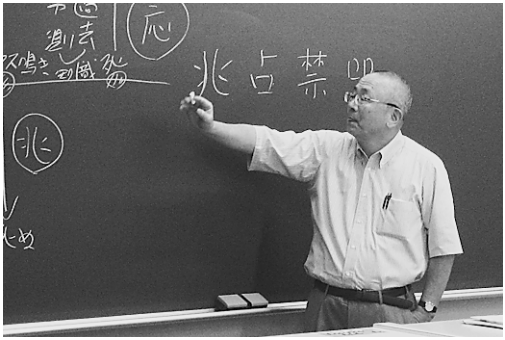
付　録

民俗学研究所第二九回公開講演会

日時　平成二九年七月一四日（金）午後三時～午後四時三〇分
会場　近畿大学Eキャンパス A館　二〇三教室
講師　国立歴史民俗博物館名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授　常光徹氏
演題　妖怪と俗信

※参加者は、教員・大学院生・学生など、三五名であった。



妖怪と俗信（講演要旨）

常光　徹

一、俗信について

俗信の捉え方は研究者によって相違があり必ずしも定まってはいないが、一般には「兆（予兆）・占（占い）・禁（禁忌）・呪（呪い）に関する身近な知識や生活の技術などで、主に心意に関わる伝承」といってよい。たとえば、「蛇の夢を見ると近いうちにお金が入る」（予兆）、「靴を蹴り上げて表がでたら晴れ、裏がでたら雨」（占い）、「夜、爪を切ってはいけない」（禁忌）、「霊柩車に出合ったら親指を隠す」（呪い）といった伝承である。身近な生活の一齣をすくい取りながら、短い言葉で表現される内容が大部分を占めている。気に止めていないようでも、日常の具体的な場面で影響を及ぼしていることが少なくない。

柳田国男は一九三五年に出版した『郷土生活の研究法』のなかで、民俗資料の三部分類案を提示し、第一部有形文化、第二部言語芸術、第三部心意現象とした。第三部の心意現象は、見たり聞いたりしただけでは理解が難しい、柳田の言葉でいえば「感覚に訴え」て理解をするものである。心意は、ものの見方や感じ方、心のくせ、幸福感や恐怖感など広く心のありようを表わす言葉で俗信と深く関わっており、柳田は心意現象の解明が民俗学の目的であるとさえ言っている。

二、妖怪を理解する三つの視点

妖怪とは何か、という問いを一言で説明するのは難しい。この言葉はさまざまな意味をまとっているからである。ふつうは、天狗や河童などを思い浮かべる人が多いように、妖怪は、不思議な現象を引き起こす超自然的な存在をいうが、ここでは小松和彦氏の述べる三つの視点から見てみる。

・「出来事としての妖怪」、つまり現象妖怪。木こりが山小屋に泊っていると、夜中に大木がメリメリと伐り倒される音がする。翌朝、音のしたあたりをさがしても倒れた木はない。怪音である。また、夕方になると、橋のたもとからショキショキとなにやら怪しい音が聞えてくる。原因はわからないが、小豆を洗っているときの音に似ているところから、やがて、この現象を〈小豆洗い〉と呼ぶようになる。特定の怪異現象を土地の者が共通体験として語り伝えていく過程で、名づけが行なわれる場合が少なくない。

・「超自然的存在としての妖怪」、つまり存在妖怪。現象としての妖怪は、なぜそのような現象が起きるのかを説明する物語に関心が向かっていく。〈小豆洗い〉は、ショキショキという怪音（現象）を示す言葉だが、やがて、この音は「小豆洗い」という婆さん（妖怪）が小豆を洗っている音らしい、という具合に、現象を生み出す妖怪存在へと想像力をふくらませる。

・「造形化された妖怪」、つまり造形妖怪。ふしぎな現象を引き起こす存在妖怪は、やがて、民間に伝承される姿かたちなどをヒントに、絵師によって絵巻や錦絵・摺物・書物などに描かれ、視覚化されていった。それが活発に行われたのは江戸時代で、とくに一八世紀後半からだといわれる。視覚化・造形化された妖怪が、印刷技術や出版事情の向上により広く流通するにしたがって、妖怪存在のイメージの固定化という傾向が生まれた。造形妖怪は、基本的に民間伝承のコンテクストから切り離された世界で活躍し、妖怪のキャラクター化の道を拓いていった。

小松和彦『妖怪文化入門』角川ソフィア文庫、二〇一二年。

三、妖怪の難を逃れる方法

思いがけず妖怪に出合ったときには、どうすればよいか。危機を回避し難を逃れる知恵や行動が各地に伝承されている。その一端を紹介する。

・「威嚇型」。妖怪を威嚇したり相手が嫌うことや弱点を突いて、その場から退散させる方法。ただし、わざわざ妖怪をさがしだして威嚇・攻撃するというのではない。偶然の遭遇や、妖怪に狙われて身の危険を感じたとき、被害を避けるための積極的な行動である。

たとえば、妖怪は生臭いものを嫌う。つぎの話は、愛媛県西条市小松町石鎚中村の曽我正善氏（一九二五年生れ）が語る鍋蓋の話である。

山道を歩きよったら、急に歩けんようになって座り込んでしまう。それを昔の人は、「イキアイモンに行き遭うた」と言いよったですよ。それは目に見えんけんど、イキアイモンちゅうて言うんじゃそうです。今流に言えば、森の妖精じゃわいねえ。それで、その人は動けんので、それをお呪（まじな）いするのに、おかず鍋の蓋で扇ぐんです。昔はご飯を炊く鍋と、おかずを炊く鍋と二つあったんよ。そのうち、おかずを炊くほうの鍋の蓋を、近くの家まで借りにいって、その人を扇ぐんじゃそうです。そしたら風が生臭いので、妖怪は辟易して逃げていくんですね。で、それからまた歩けるようになる。鍋の蓋を貸すほうも、イキアイモンちゅうて知っとるから貸してくれる。

渡辺裕二「四国の民俗 聞き書き―イキアイモンの話」『日本民話の会通信』二一七号、二〇一一年、日本民話の会。

イキアイモンとは、山野などで出合うと病気になるとされる悪霊のことである。興味深いのは、イキアイモンに出合って憑かれたとき、これを祓い落とすためにわざわざおかずを炊くほうの鍋蓋を借りてきてあおぐという点である。おかず用の蓋には生臭物の匂いが沁みている。それでイキアイモンが逃げていくのだという。三重県鈴鹿市では、風邪の治らない者が、火鉢にスルメをくすべると、風邪の神が現れ「くすべられてけむいから出て行くわ」と言っていなくなったという話が伝えられている。口さけ女に出合ったら「ポマード、ポマード」と唱えると逃げて行くというのも威嚇の一種である。

・「看破型」。妖怪やふしぎな現象に遭遇したとき、その正体を見破る方法。妖怪は正体が露見すると人をたぶらかす力を失う。妖怪の本性を見抜くための呪術的な行為や知識である。

宮本常一の「周防大島二」(『旅と伝説』三―一一、一九三〇年)につぎの話が載っている。

これは怪しいと思う船を見たら股の間から逆見(股のぞき)をするのだそうである。逆見をしてあたり前だったら幽霊船ではない。逆見をして、船が海面をはなれて、少し高く走って居るのを認める時は即幽霊船である、と。

かつて、海の仕事に従事する人たちのあいだでは、海上で怪異現象に巻き込まれたときの対処の仕方の一つとして、股のぞきをして見ればよいとの知識が知られていたようで、類似の伝承はほかにも多い。股の間からのぞき見て、相手の正体を見抜くやり方は、海の怪異以外にも確認できる。股のぞきは、妖怪の本性を見破るだけでなく、本来見ることのできない未来の世界や異国の風景を見ることができるという伝承もある。股のぞきの特徴は、対象に尻を向けた格好で、つまり相手を無視しながら、それでいて相手の様子をうかがう姿勢である。上半身と下半身

の向きが逆で、顔は下にさげて後ろを見ているが足は前を向いて立っているという、上下と前後があべこべの関係を同時に体現した形といってよい。つまり、一つの形のうちに上下前後を同時に表現するこのしぐさは、二つの領域に接していながらそのどちらでもないという境界的な性格を帯びている。それが、日常世界と異界とを媒介する股のぞきの呪的な意味であろう。

妖怪の正体を見破る手段としては、「股のぞき」のほかにも「狐の窓」からのぞく方法も知られている。また「威嚇型」「看破型」以外にも、妖怪の難を逃れる方法には「提供型」「欺瞞型」「予防型」などがある。

常光徹『予言する妖怪』歴博ブックレット三一、二〇一六年。